

助橋下遺跡 発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（松浦地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 II

2020

新発田市教育委員会

助橋下遺跡 発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（松浦地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 II

2020

新発田市教育委員会

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県新発田市浦に所在する助橋下（すけばしした）遺跡の本発掘調査記録である。
- 2 本発掘調査は、経営体育成基盤整備事業（松浦地区）に先立つもので、新潟県新発田地域振興局の委託を受けた新発田市教育委員会が調査主体となり、現地調査を令和元年7月8日から8月22日まで実施した。
- 3 本発掘調査の経費は、新潟県新発田地域振興局と新発田市が結んだ委託契約に基づき、総額の92.5%を事業者である新潟県新発田地域振興局が負担し、直接農家負担分である総額の7.5%についてはその半額を国庫補助、残りを県費補助および市費で負担した。
- 4 本発掘調査にあたっては民間調査組織による支援委託を導入し、新発田市の実施した一般競争入札の結果、国際文化財株式会社新潟営業所が受託した。
- 5 遺物・記録類は、新発田市教育委員会が一括保管している。遺物の注記は「助橋下」とし、必要に応じグリッド・層・日付等を記した。出土遺物は全点注記・分類作業を終えている。
- 6 写真撮影は田口雄一（国際文化財株式会社）が行った。出土遺物の図化作業・拓本・トレスおよび挿図・図版の作成は、田口および田口の指示のもと整理作業員が行った。
- 7 本書の編集は、鈴木暁（新発田市教育委員会）の監督のもと、田口が行った。本文の執筆は第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅳ章を鈴木が、残りを田口が行った。
- 8 本書に掲載の地形図は、国土地理院発行1/50,000地形図「新発田」および市作成の地形図であり、必要に応じ縮小している。方位は、図の天が真北を示す。
- 9 土色の観察は、『新版標準土色帖』（小山・竹原1967）を用いた。
- 10 図書館等（著作権法第31条第1項に規定する図書館等をいう）の利用者は、その調査研究の用に供するために、本報告書の全体について、複製することができる。
- 11 発掘調査から本書の作成にあたり、下記の個人・機関から御協力・御支援を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（順不同 敬称略）

五十嵐勝雄、浦自治会、新潟県教育庁文化行政課、新潟県新発田地域振興局、豊浦郷土地改良区

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と立地	1
2 周辺の遺跡と歴史的環境	2

第Ⅱ章 調査の概要

1 調査に至る経緯と調査体制	4
2 調査の経過	6

第Ⅲ章 助橋下遺跡の遺構と遺物

1 グリッド設定と基本土層	7
2 遺構の記載方法	8
3 遺構と遺物	9

第Ⅳ章 ま と め

引用参考文献	22
--------------	----

挿 図 目 次

第1図 助橋下遺跡の位置	1
第2図 助橋下遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第3図 試掘・確認調査の範囲と近隣の遺跡	4
第4図 本発掘調査範囲と確認調査トレンチ	5
第5図 グリッド配置	7
第6図 基本土層	8
第7図 遺構配置図	10
第8図 1号掘立柱建物	11
第9図 1～4号土坑と出土遺物	12
第10図 5～9号土坑と出土遺物	14
第11図 1号溝と出土遺物	15
第12図 P1～7 (Cc グリッド) と出土遺物	16
第13図 P 8～10 (Ec グリッド)・P14～16 (Eb グリッド)	17
第14図 P11～13 (Fc グリッド)	18
第15図 遺構外出土遺物	19

表 目 次

表1 遺構観察表	20
表2 遺物観察表	20

図 版 目 次

図版1 完掘状態	図版4 3～7号土坑の調査状況
図版2 調査前の状況、調査状況、基本土層、1号掘立柱建物の調査状況	図版5 7～9号土坑・1号溝・ピットの調査状況
図版3 1号掘立柱建物・1～3号土坑の調査状況	図版6 出土遺物

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

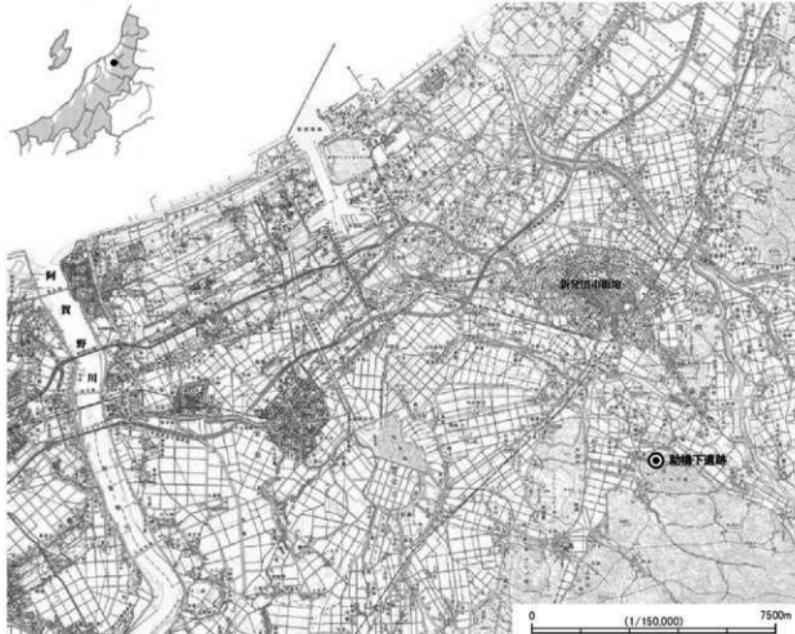
1 遺跡の位置と立地

新潟県新発田市は新潟市の東方約25kmに位置し、面積が約533km²、人口は約9万8千人の地方都市である。市の中央部にある旧新発田藩の城下町を中心とした市街地と、周辺の農村地帯から構成される。

市域は、新潟平野の一部をなす平野部と、東縁の五頭山地・柳形山脈・飯豊山地により構成される。平野部は、東側の山地から流下する加治川水系の河川作用による台地・低地と、海岸線に並行な砂丘列のある海岸平野、および潟湖の干拓地などにより形成される（国土地理院 1993）。

本遺跡の所在する新発田市南部は、新潟平野と越後山地の境界部に位置し新潟平野・笛神丘陵・五頭山地に大別される。笛神丘陵と五頭山地の間には村杉低地帯が分布し、笛神丘陵・村杉低地帯・五頭山地は北北東—南南西方向に伸びており、新発田一小出構造線に沿った地形と見ることができる（笛神団体研究グループ 1980）。

助橋下遺跡は、市南部の松浦地区、浦地内に所在する。遺跡の南北には五頭山地の北端部を成す低丘陵がそれぞれ東西に延び、これに挟まれた微高地に立地する。北側の丘陵は河川の浸食により南側の山塊から切り離された独立丘陵となっている。遺跡の立地する微高地は、加治川から分流する芋御江川および乙見江用水路に沿って形成された自然堤防状の地形と考えられる。



第1図 助橋下遺跡の位置

2 周辺の遺跡と歴史的環境

第2図には本遺跡周辺の奈良・平安時代の遺跡を示した。周囲は、沖積平野に張り出す加治川扇状地と五頭山地、山地西側に並列する筆神丘陵、これらから発する小河川による複合扇状地からなる。分布図からは、各遺跡が扇状地扇端部や河川の自然堤防状の微高地など、地理的好条件下に立地していたことが見てとれる。

本遺跡よりも加治川の上流側には奈良・平安時代の遺跡は希少で、加治川の右岸側でも同時期の遺跡はない。一方、下流側には同時代の遺跡が多数分布する。この状況を土地条件図（国土地理院 1993）と照合すると、加治川新扇状地上に遺跡の少ないことがわかる。特に標高 20m 以上にはほとんど認められない。つまり、扇端部付近に遺跡が営まれた結果と考えられる。また、加治川新扇状地の形成自体が比較的新しい可能性もある。

近隣の古代遺跡では本遺跡の東方 1.3km の真栗沢遺跡（1）で本发掘調査が実施されている（新発田市教育委員会 2019）。調査の結果、8世紀後半から9世紀前半の溝や土坑、8世紀後半から11世紀代の鍛冶炉・焼土遺構が検出されている。この他に松浦地区は場整備事業に係る試掘・確認調査によって本遺跡の西方 1km ほどにある浦遺跡（2）・石藏遺跡（3）・興野遺跡（4）、北西 0.8km にある沢田遺跡（5）の概要が明らかとなった。出土遺物からいざれも 8世紀後半から9世紀前半を主体とする集落と考えられ、北方 2.2km の山王遺跡（6）も、8次に渡る発掘調査により同時期の集落と判明している（新発田市教育委員会 1998）。西方の小坂遺跡（7）（発掘調査報告書では「小坂館遺跡」と呼称）、妻ノ神遺跡（8）・正尺遺跡（9）は小坂地区は場整備に伴い本発掘調査され、小坂遺跡と妻ノ神遺跡は8世紀後半から9世紀前半を主体、正尺遺跡は9世紀後半から10世紀前半主体の集落と判明している（川上 2000）。また、加治川扇状地の西端に接する福島潟沿岸に立地する曾根遺跡（10）は8世紀中葉から9世紀前半を主体とする大規模な遺跡で、「郡」「上殿」等の多量の墨書き土器や木簡が出土しており、官衙的な性格を持つ遺跡と考えられている（家田ほか 1981・1982、川上 1997）。

遺跡西方の筆神丘陵には須恵器窯と製鉄遺跡が多く分布する。須恵器窯は8世紀前半の志村山窯跡を最古として8世紀中葉の岡屋敷窯跡（11）、8世紀末から9世紀前半の高山寺窯跡（真木山 A）（12）・馬上窯跡（真木山 D）（13）・堤上窯跡（14）、9世紀中葉の狼沢 2号窯跡・道幅窯跡（15）などが確認されている（筆澤 2012）。製鉄遺跡は須恵器窯跡に近接して営まれ、このうち発掘調査された万代かなくそ沢遺跡（真木山 B）（16）と五月山遺跡（真木山 C）（17）は8世紀から10世紀頃の操業と考えられている（岡・本間ほか 1981）。

浦の地名の初出は、元亨 2（1322）年 3月 7 日付けの平連資大神宮役夫工米配分状案（『越後文書宝翰集』大見安田氏文書）に記された「浦分」を充てる説（「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 1989）があるが、同時期の他文書には認められていない。浦の隣村である松岡は、上杉定実判物（『越後文書宝翰集』大見安田氏文書）に永正 4（1507）年 12 月「蒲原郡豊田庄内松岡村」の記載があり豊田莊内であることが分かっている（矢田ほか 2008）。同じく八幡についても高野山清浄心院の『越後過去名簿』に、永正 17（1520）年 9 月 25 日「トヨタ庄ヤワタ玉泉」の記述があり（山本 2008）、豊田莊内といえる。これらを考えると、浦もまた豊田莊に属していたとみるべきであろう。豊田莊は長承 4（1135）年に立券された東大寺領で、建保 2（1214）年の東大寺領諸庄田数所当等注進状（『東大寺要録』）によれば「南限鹿子岡、北限佐々木河」とあり、概ね現在の豊浦地区・松浦地区的範囲と推定される（荻野 1980）。12世紀以後、本遺跡周辺は豊田莊に属したと考えられる。

それ以前の資料を遡ると、当地は『和名類聚抄』による沼重郡に属したと考えられる。沼重郡は足羽・沼垂・賀地の 3郷からなるが、豊田莊立莊に関する保延 7（1141）年の越後國留守所文書（『平安遺文』）には、越後國留守所から加地郷司に対して豊田莊に関する下文が發給されており、豊田莊は加地郷内に立莊されたと考えられる（阿部・木村 1980）。つまり、当地は豊田莊以前は沼重郡加地郷に属していたといえるだろう。



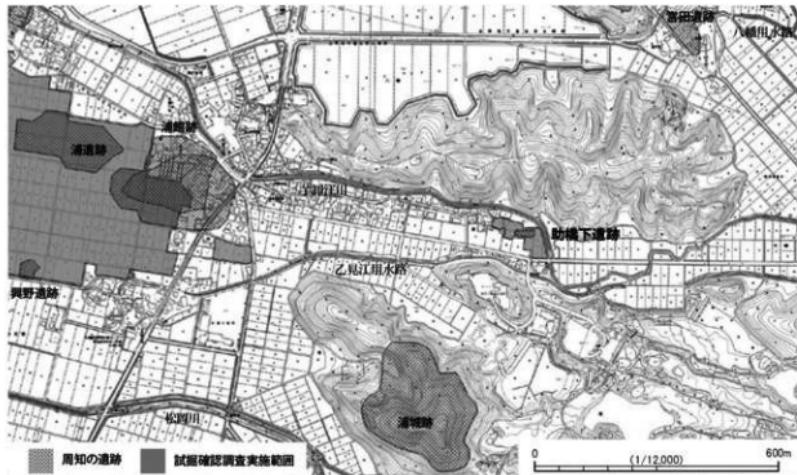
第2図 助橋下遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅱ章 調査の概要

1 調査に至る経緯と調査体制

分布調査と試掘・確認調査 助橋下遺跡は、昭和 59 年に実施された新潟県教育委員会の遺跡詳細分布調査により周知化されたが、遺物の散布することはそれ以前から知られており、昭和 12 年の『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告』では「弥生式土器並びに石器」の散布地としてドットが落されている（齋藤 1937）。その後、当地においては場整備事業の計画が持ち上がり、これに先立つ平成 26 年 3 月に新発田市教育委員会（以下、市教委）が実施した分布調査で遺物が採集され、遺跡であることを追認した。ほ場整備事業は、県営の経営体育成基盤整備事業松浦地区として平成 25 年に採択され、工事の実施が決定した。これを受け、新潟県新発田地域振興局農村整備部（以下、県振興局）と市教委との間で協議を行った。本遺跡は工事の計画区域内にあることから、県振興局および豊浦郷土地改良区との協議を経て平成 27 年 6 月に市教委が範囲確認調査を行った。その結果、助橋下遺跡は畑による耕作で失われている部分が多いものの、出土遺物から古代と中世の遺跡と判明した。遺跡はそれまでの周知範囲中央部の畠地部分で残存しており、地表面から 20 ~ 30cm 程度の深さに遺構確認面の存在が明らかとなった。

この範囲確認調査結果を受けて助橋下遺跡の範囲を変更するとともに、その後の取り扱いについて県振興局と市教委は協議を行った。当地は高所に位置することから削平は免れない計画であり、確認調査によって明らかとなった700mについて本發掘調査を行うことで合意した。ただし、市教委は調査要望が過多の状況にあり人員等の確保が困難であることから、民間調査組織による支援委託の導入を行うこととした。調査は市教委が主体となり市職員が調査担当の下、民間調査組織から土木作業管理者・主任調査員・作業員等の人的支援と機器材の物



第3図 試掘・確認調査の範囲と近隣の遺跡

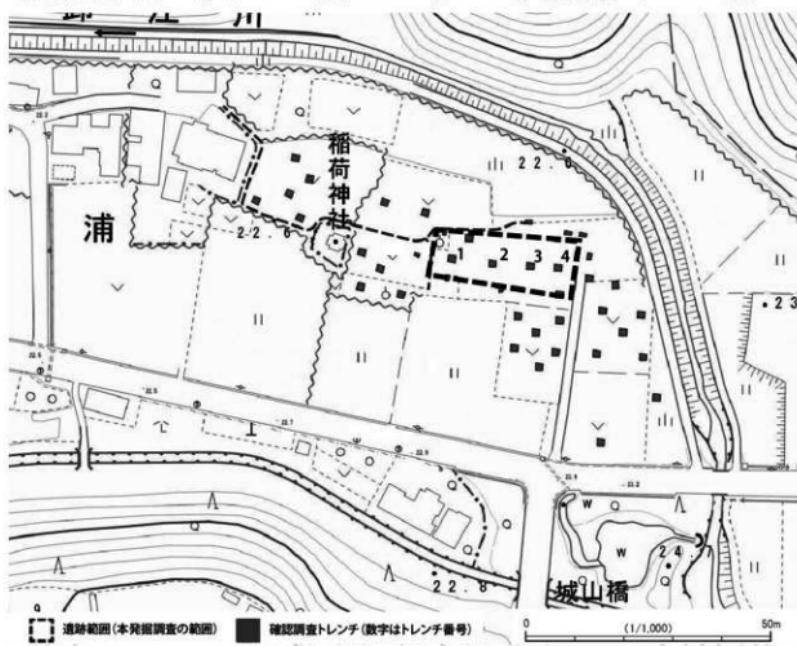
的支援および測量等の図面作成の支援を受けて実施することとした。

本発掘調査 以上を受け、令和元年度の本発掘調査実施に向け平成 31 年 4 月 26 日付けで新潟県新発田地域振興局長（以下、県振興局長）と新発田市長との間で発掘調査費用負担契約を締結した。また、県振興局は文化財保護法第 94 条 2 項の「埋蔵文化財発掘の通知」を平成 31 年 3 月 4 日付け芝振農整第 989 号で新潟県教育長へ通知した。委託業者については一般競争入札の結果、国際文化財株式会社新潟営業所（以下、国際文化財（株））に決定した。市教委は新潟県教育委員会へ発掘調査着手を令和元年 6 月 26 日付け文行第 379 号で報告し、7 月 8 日より掘削作業に入った。調査の結果、発掘箇所は烟による擾乱が著しく当初の想定よりも遺構の遭存状態が悪いことが分かった。このため調査期間が見込みよりも短くなった。このため、国際文化財（株）との支援委託契約を変更するとともに、県振興局長と令和 2 年 2 月 10 日付け芝振農整第 717 号で調査経費負担金の変更契約を締結した。県振興局への発掘調査事業完了報告書は、令和 2 年 3 月 23 日付け文行第 1270 号で提出した。また、令和 2 年度については、発掘調査報告書の編集・印刷のために令和 2 年 7 月 28 日付けで県振興局長と新発田市長との間で発掘調査費用負担契約を締結した。

調査体制

平成 27 年度（確認調査） 調査主体 新発田市教育委員会（教育長 大山 康一）

監 理 田中 耕作（文化行政課長）	調 査 員 石垣 義則（文化行政課文化財技師）
總 括 平山 真（〃 参事）	坂野 岳史（〃 臨時職員）
調査担当者 鈴木 晃（〃 主任）	庶 務 渡邊美穂子（〃 主任）



第 4 図 本発掘調査範囲と確認調査トレンチ

令和元年度（本発掘調査・整理作業・報告書作成） 調査主体 新発田市教育委員会（教育長 工藤 ひとし）
監 理 平山 真（文化行政課長） 土木作業管理者 仁田 剛（国際文化財株式会社）
總 括 横山 利弘（〃 課長補佐） 研 究 務 渡邊美穂子（文化行政課係長）
調査担当者 鈴木 晓（〃 主任） 星野 綾香（〃 主事）
主任調査員 田口 雄一（国際文化財株式会社）
令和2年度（報告書作成・印刷） 調査主体 新発田市教育委員会（教育長 工藤 ひとし）
監 理 平山 真（文化行政課長） 調査担当者 鈴木 晓（文化行政課主任）
總 括 小林 大作（〃 課長補佐） 研 究 務 渡邊美穂子（〃 係長）

2 調査の経過

6月26日～7月5日 0.4m級のバックホーを搬入して現場事務所敷地を整地し、駐車場用の鉄板敷設、仮設ハウス・トイレを設置した。併せて発電機などの資材および発掘器材、現場事務所用の資材を搬入した。

7月8日～7月26日 バックホーを用いた表土掘削に着手する。残土は調査区北側の低地部分に仮置きした。併せて調査区周辺の除草を行い、続けて作業員による人力掘削に着手した。表土掘削の結果、畝の作付けによる攪乱がほぼ全面に及び、特に北半部で地中深くまで達していると判明した。この結果、近現代の陶磁器やビニール等のゴミを含む掘り込みと、重複関係からこれらよりも新しいプラン、同様の埋土からなるものを攪乱と判断し、比較的しまりの強い褐色土を主体とするプランを遺構とする見解に至った。また、確認調査時の見解から遺構確認面を地山（Ⅲ層）上面とした。この面で掘り込みが概ね識別できることと遺物の出土状態からみて判断したが、一方で畝作の影響による攪乱が著しく、遺構の見落としも発生しかねないため、完掘後にⅣ層上面まで掘り下げて再確認を行うこととした。また、遺構確認作業において検出した攪乱のうち、遺構と直接重なるものと北半部の大型の攪乱については並行して掘削を行った。終了後に遺構検出状況の写真撮影を行った。

7月29日～8月8日 遺構掘削に着手する。西から東に向かって掘り進めた。1号土坑では須恵器長頸瓶がまとまって出土し、記録作成を行った。1号掘立柱建物では各ピットの土層断面図作成のほかにエレベーション図も作成した。遺構の完掘後に全体および調査区周辺を清掃し、ドローンを用いて完掘状態の撮影を行った。

8月19日～30日 お盆期間の夏季休暇を挟んで、遺構の再確認のための掘削を行う。IV層上面を目途として現況の遺構確認面よりも5～10cmほど掘り下げる。なお、北半部及び東部では既にIV層上面に達しているため、掘り下げは南側西半部を対象とした。未掘だった攪乱から古代の土師器・須恵器が出土したが、新たに遺構を確認することはなかった。以上で掘削作業を終了し、8月30日に撤収作業を完了した。

整理作業 現地調査の終了後、屋内整理作業に着手した。作業は引き続き国際文化財の支援委託を受け、現場の近隣に設置した整理作業場で作業を実施した。出土遺物は水洗した後に遺構や出土層位などの情報を注記した。接合作業の終了後、報告用遺物を選別して実測・採拓・撮影・観察表作成を行った。遺構などの現場記録類については、平面と断面の整合確認を進め、図面の合成を経て報告書版下を作成した。写真については、デジタルデータを整理し、記録の照合を進めた。各記録類に基づいて原稿執筆を行った。報告書は翌令和2年度に印刷・刊行した。

第Ⅲ章 助橋下遺跡の遺構と遺物

1 グリッド設定と基本土層

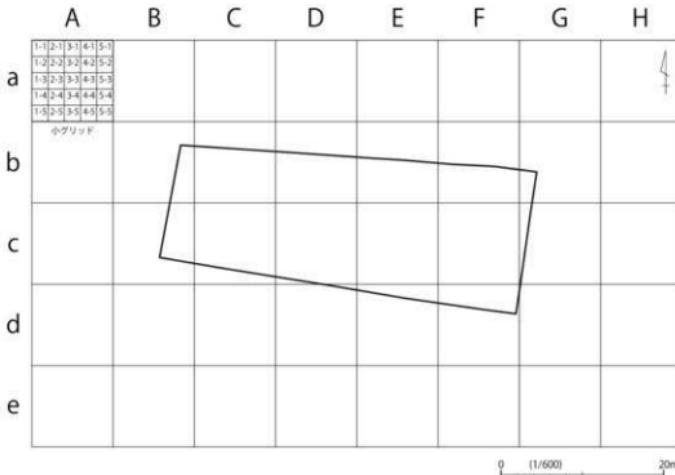
調査区とグリッド設定（第5図） 助橋下遺跡の調査では、試掘調査の結果と現況地形から、東西44m、南北は西辺14m、東辺18mの概ね長方形の調査区を設定した。また、調査区全体にグリッドを設定し、遺構の位置標記、遺物の取り上げに利用した。グリッドは、遺跡範囲北西に起点となる「Aa1-1」グリッド（X=211,600、Y=74240 世界測地系第VII系）を設定し、10m単位で西から東へA～H、北から南へa～eの大グリッドを設定した。さらに、大グリッドを2mごとの小グリッドに区切り、北西を基準として1-1～5-5と設定した。

基本土層（第6図） 基本土層は、調査区北壁中央で1か所、調査区南壁の西側と東壁でそれぞれ1か所の計3か所で観察、記録を行った。

基本土層はI～IV層に大別される。I層は表土、II層は搅乱土、III層とIV層は地山である。

I層は表土で、畑の耕作土である。粘性・しまりともやや弱い暗褐色土である。II層は粘性・しまりともやや弱いぶい黄褐色土を主体とし、地山ブロックを多量に含む。下面の凹凸が著しく、畑の耕作により形成されたと考えられる。III層は、粘性・しまりともやや弱い暗オリーブ砂質シルトないし細砂を主体とする。本層の上面が遺構確認面である。ただし、調査区北半と東端は耕作深度が深く、特に調査区北半はIII層の大半が削平されていた。IV層は、粘性は弱くしまりの強いオリーブ細砂を主体とする。調査区北半はII層直下が本層となり、本層上面で遺構を確認した。

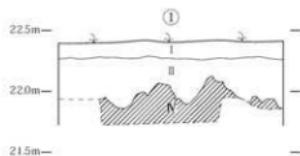
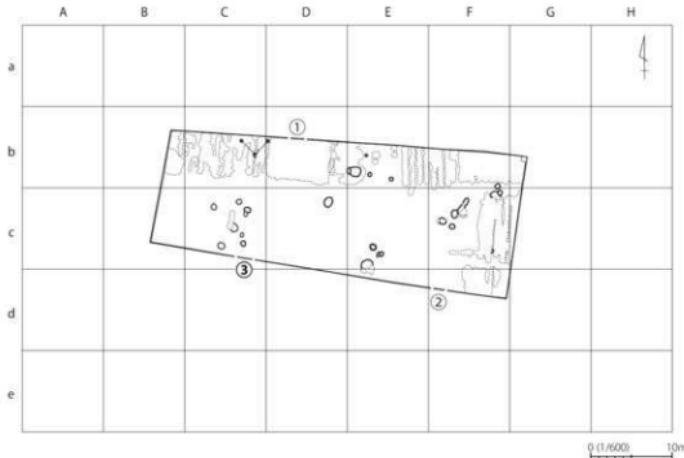
なお、今回設定した調査区外の西側の試掘調査では、調査区内に比して地山の検出面が低く、その下で砂礫層を確認している。これらは、調査区北側を西流する加治川による影響を受けたものと考えられる。



第5図 グリッド配置

2 遺構の記載方法

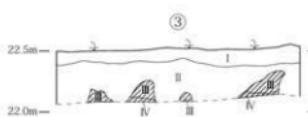
発掘調査時に検出した遺構は、掘立柱建物、土坑、溝、ピットに類別し、調査した順に1から番号を付した。なお、掘立柱建物を構成する柱穴は、建物跡の番号の後にP1～P3と個別に番号を付している。整理作業の過程で種別が変わったものが存在し、それらは新たに番号を付け直した。遺構の種別は平面・断面形状から判別した。



基本土層1
I層 7.5YR3/2 嘴褐色土 粘性・しまりともやや弱い、表土。
II層 10YR4/3 にぶい嘴褐色土 粘性・しまりともやや弱い、径3～5mmの炭化物を微量、径1～50mmの地山ブロックを多量に含む。塊状土。
III層 5Y4/4 オリーブ緑色 粘性弱くしまりやや弱い、地山。



基本土層2
I層 7.5YR3/3 嘴褐色土 粘性・しまりともやや弱い、表土。
II層 10YR4/3 にぶい嘴褐色土 粘性・しまりともやや弱い、径1～3mmの炭化物を微量、径3～10mmの地山ブロックを多量に含む。塊状土。
III層 5Y4/4 嘴オリーブ緑色シルト 粘性弱くしまりやや弱い、地山。
遺構確認。



基本土層3
I層 7.5YR3/2 嘴褐色土 粘性・しまりともやや弱い、表土。
II層 10YR4/3 にぶい嘴褐色土 粘性・しまりともやや弱い、径3～5mmの炭化物を微量、径5～20mmの地山ブロックを少量含む。塊状土。
III層 5Y4/4 嘴オリーブ緑色シルト 粘性弱くしまりやや弱い、地山。
遺構確認。
IV層 5Y5/4 オリーブ緑色 粘性弱くしまりやや弱い、地山。



第6図 基本土層

3 遺構と遺物

今回の発掘調査で検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土坑9基、溝1条、ピット16基である（第7図）。調査区北半で検出した遺構はIV層上面で検出し、それ以外の遺構はIII層上面で検出した。遺構の帰属時期については、遺構の重複による重複関係と出土遺物の時期から判別した。遺物は、遺物収納箱2箱分の古代の土師器椀・甕、須恵器壺・瓶・甕と鉄滓が出土している。

1号掘立柱建物（第8図） 調査区の北西部、Cb～Db グリッドに位置する。IV層上面で検出した。他遺構との重複関係はない。P 1～3の3基の柱穴から構成される桁行、梁行とも1間以上の掘立柱建物である。建物の北側は調査区外へ続くと考えられる。規模は、桁行3.3m、梁行2.9mで、建物の主軸方位はN 48°-Eである。P 1の平面形は円形で、規模は径0.35m、深さ0.30mである。埋土は単層で、柱痕跡は確認していない。P 2の平面形は梢円形で、規模は長軸0.42m、短軸0.34m以上、深さ0.25mである。埋土は3層に分層され、柱痕跡は確認していない。P 3の平面形は梢円形で、規模は長軸0.34m、短軸0.30m、深さ0.12mである。埋土は単層で、柱痕跡は確認していない。

いずれのピットからも遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

1号土坑（第9図） 調査区の西側、Cc グリッドに位置する。III層上面で検出した。他遺構との重複関係はない。平面形は円形で、断面形は台形を呈する。規模は径0.74m、深さ0.22mである。埋土は2層に分層され、1層は暗褐色土を主体とし、炭化物を微量、地山ブロックを少量含む。2層は褐色砂質土を主体とし、地山ブロックを微量含む。

遺物は、土師器椀・甕、須恵器瓶が埋土中から出土しており、その内の土師器椀（1）と須恵器長頸瓶（2）を図示した。1はロクロ成形の土師器椀の口縁～体部で、体部はやや内湾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。2は須恵器長頸瓶で、遺構検出面でまとめて出土した。頸部～体部下半が残存しており、頸部は直線的にやや外傾して立ち上がり、体部最大径は中位や上部にある。体部外面下部に棒状工具による圧痕が見られる。帰属時期は、出土遺物から9世紀後半に位置づけられる。

2号土坑（第9図） 調査区の中央部、Ec グリッドに位置する。III層上面で検出した。他遺構との重複関係はない。平面形は不整梢円形と考えられ、南側は搅乱に壊されている。断面形は台形を呈する。規模は、長軸1.48m、短軸1.04m以上、深さ0.22mである。埋土は2層に分層され、1層は暗オリーブ砂質土を主体とし、地山ブロックを多く含む。2層は灰オリーブ砂を主体とし炭化物を微量含む。

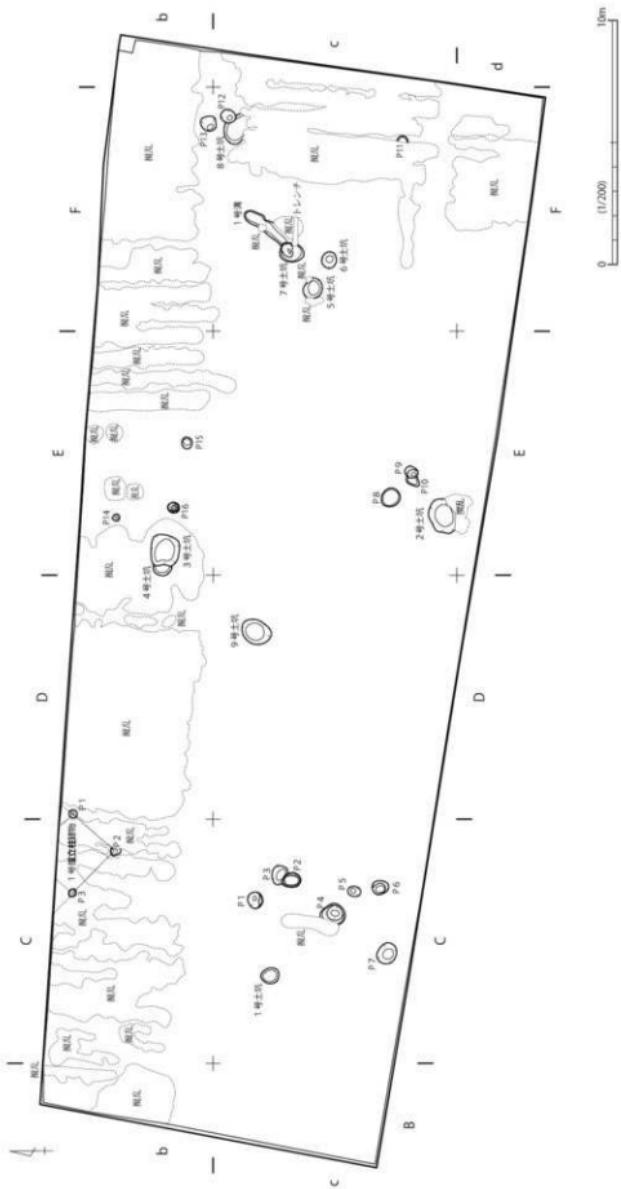
遺物は土師器椀・甕片が出土しているが、小片のため図示していない。帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

3号土坑（第9図） 調査区の中央部、Eb グリッドに位置する。IV層上面で検出した。4号土坑を壊して構築されている。平面形は不整形で、断面形は西側が開く台形を呈する。規模は長軸1.24m、短軸1.16m、深さ0.24mである。埋土は4層に分層され、1層は暗褐色砂質土を主体とし、炭化物と地山ブロックを少量含む。2層は黒褐色土を主体とし、炭化物を微量、地山ブロックを極めて多量に含む。3層は褐色砂質土を主体とし、炭化物を微量、地山ブロックを多量、黒色土ブロックを多量に含む。4層は褐色混砂土を主体とし、炭化物を微量、地山ブロックを多く含む。

遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

4号土坑（第9図） 調査区の中央部、Eb グリッドに位置する。IV層上面で検出した。東側は、3号土坑に壊されている。平面形は円形と考えられ、断面形は台形を呈し、西側は段を持つ。規模は、径0.77m、深さ

第7図 道標配置図

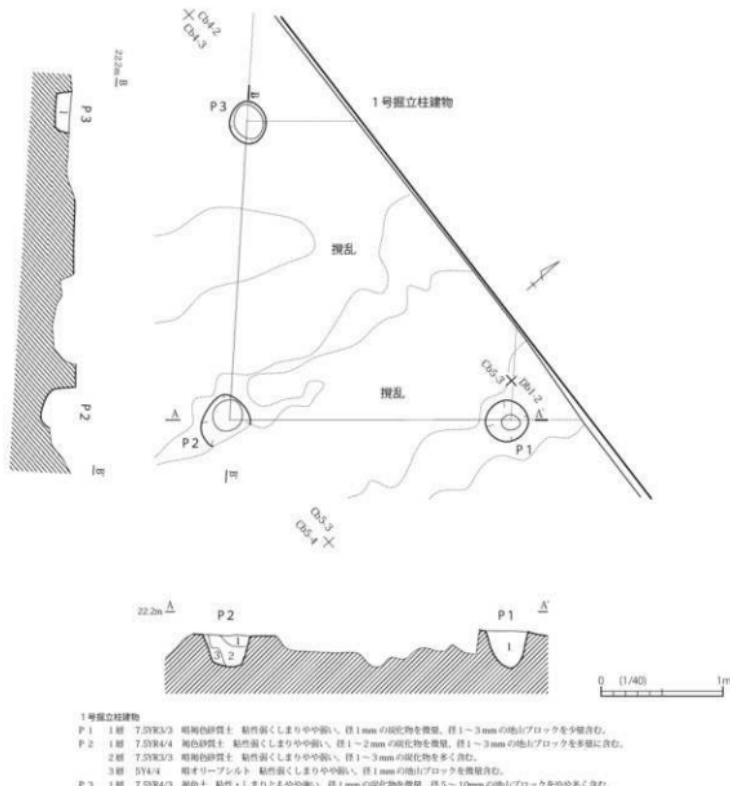


0.12mである。埋土は3層に分層され、1層は黒褐色土を主体とし、地山ブロックを多く含む。2層は暗褐色砂質土を主体とし、地山ブロックを多く含む。3層は暗オリーブ混砂土を主体とし、地山ブロックを多く含む。

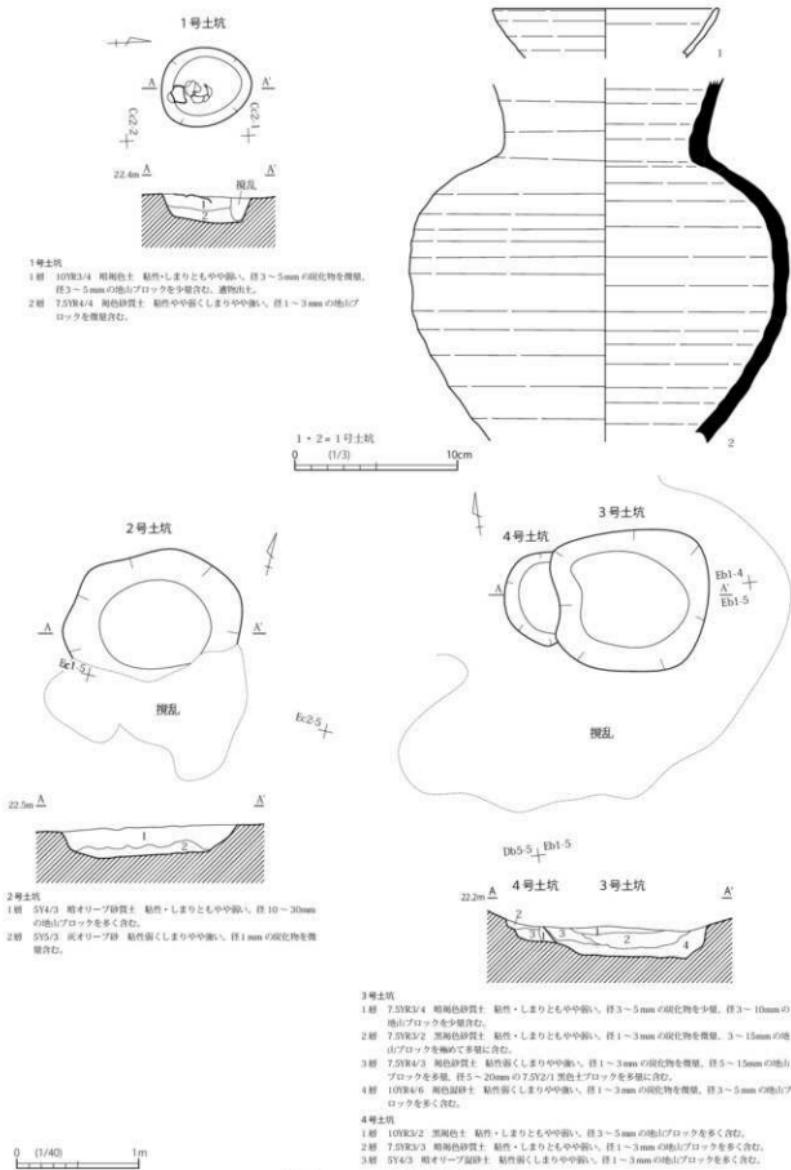
遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

5号土坑（第10図） 調査区の東側、Fc グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形で、南北の一部を擾乱に壊されている。断面形は台形である。規模は径 0.85m、深さ 0.14m である。埋土は3層に分層され、1層は褐色砂質土を主体とし、焼土粒を多量、地山ブロックを少量、炭化物を微量含む。2層は褐色砂質土を主体とし、地山ブロックを少量含む。3層は暗オリーブ混砂土を主体とし、炭化物を微量含む。

遺物は3層より土師器甕片が出土しているが、小片のため図示していない。帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。



第8図 1号掘立柱建物



第9図 1~4号土坑と出土遺物

6号土坑（第10図） 調査区の東側、Fc グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した、平面形は円形で、断面形は開いたU字形を呈する。規模は径0.67m、深さ0.39mである。埋土は4層に分層され、1層は暗褐色土を主体とし、炭化物と地山ブロックを少量含む。2層は暗オリーブ褐色土を主体とし、地山ブロックを少量、炭化物を微量含む。3層はオリーブ褐色砂質土を主体とし、炭化物を微量含む。4層は暗オリーブ砂質土を主体とし炭化物と地山ブロックを微量含む。

遺物は土師器甕片が出土しているが、小片のため図示していない。帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

7号土坑（第10図） 調査区の東側、Fc グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。1号溝を壊して構築されている。平面形は楕円形で、断面形は台形でテラス状に段を持つ。規模は長軸0.98m、短軸0.76m、深さ0.36mである。埋土は3層に分層され、1層は黒褐色砂質土を主体とし、地山ブロックを少量含む。2層は褐色混砂土を主体とし、地山ブロックを微量含む。3層は暗オリーブ混砂土を主体とし、炭化物を微量、地山ブロックを少量含む。

遺物は土師器椀・甕片が出土しており、そのうち土師器椀（3）を図示した。3はロクロ成形の土師器無台椀の底部である。底部には、回転糸切りの痕跡が見られる。帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

8号土坑（第10図） 調査区の東側、Fc グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。北東側の一部はP12に、南側は搅乱に壊されているが、平面形は楕円形と考えられる。断面形は台形である。規模は長軸1.32m以上、短軸0.99m、深さ0.10mである。埋土は2層に分層され、1層は黒褐色土を主体とし、焼土粒・炭化物・地山ブロックを多量に含む。2層は暗オリーブ砂質土を主体とし、黒褐色土を少量、炭化物を微量含む。

遺物は土師器甕片が出土しているが小片のため図示していない。帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

9号土坑（第10図） 調査区の中央、Dc グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は楕円形で、断面形は台形を呈する。規模は長軸1.2m、短軸0.96m、深さ0.30mである。埋土は3層に分層され、1層は黒褐色土を主体とし、地山ブロックを少量含む。2層は暗褐色砂質土を主体とし、地山ブロックを多量、炭化物を微量含む。3層は暗オリーブ砂質土を主体とし、地山ブロックを多く含む。

遺物は土師器片と鉄滓が出土しているが、小片のため図示していない。帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

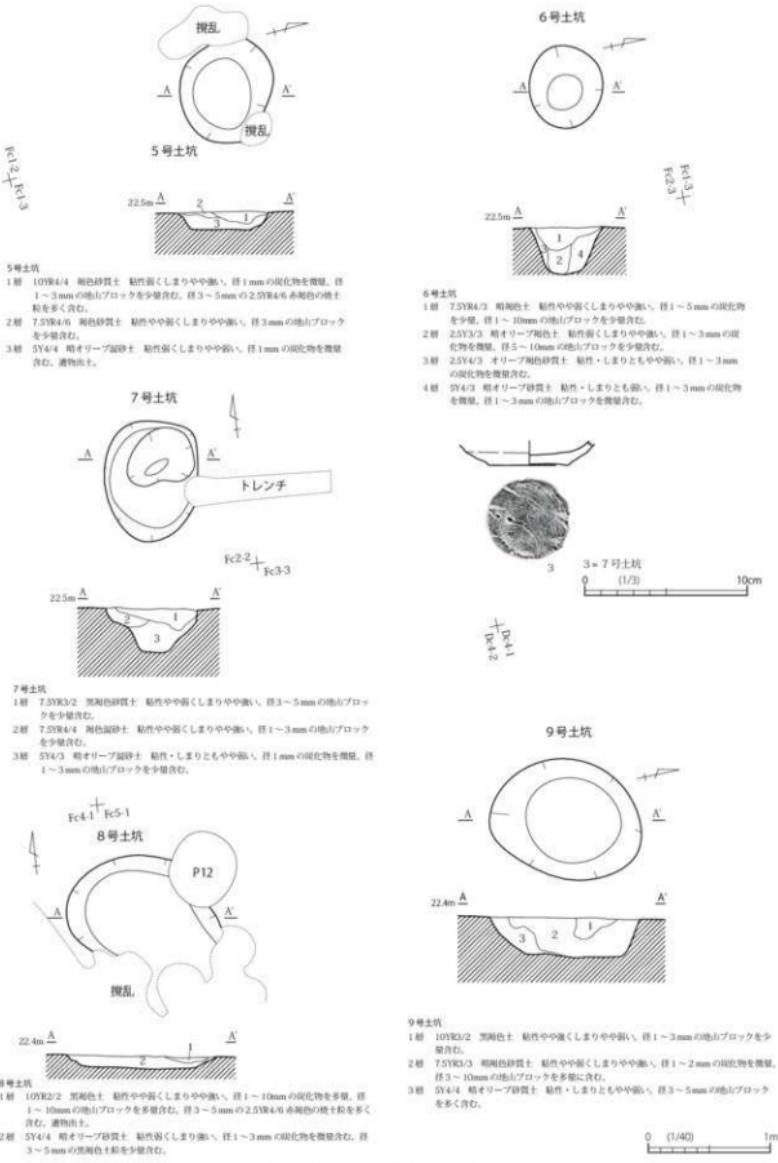
1号溝（第11図） 調査区の東側、Fc グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。南側は7号土坑に、東側は搅乱に壊されている。平面形は直線状で、断面形は台形である。規模は長軸2.07m以上、幅0.52m、深さ0.13mである。埋土は2層に分層され、1層は暗褐色土を主体とし、炭化物と地山ブロックを少量含む。2層は暗オリーブ混砂土を主体とし、地山ブロックを少量含む。

遺物は、土師器椀・甕・須恵器片が出土している。いずれも小片であるが、そのうちの土師器椀（4）を図示した。4はロクロ成形の土師器椀の口縁部である。体部は直線的に外傾しそのまま口縁部に至る。帰属時期は、出土遺物から古代と考えられる。

ピット（第12～14図） 調査区全体で16基検出した。検出したピットは、Cc グリッド、Eb グリッド、Ec グリッド、Fc グリッドの4か所にまとまりが見られた。各グリッドごとに報告する。

Cc グリッドでは、Ⅲ層上面でP 1～7の7基を検出した。このうち、P 2はP 3と重複関係にあり、P 2はP 3を壊して構築されている。P 4は西側を搅乱に壊されている。平面形は楕円形が5基、円形が2基で、断面形はU字形ないし台形を呈し、段を有するものもある。規模は、長軸0.53～1.04m、深さ0.17～0.59mである。埋土はいずれも複層だが、柱痕跡は確認されていない。

遺物は、P 2～4から土師器椀・甕片と鉄滓が出土しており、そのうちのP 2から出土した土師器甕（5）を



第10図 5~9号土坑と出土遺物

図示した。5はロクロ成形の土師器甕口縁部である。頭部は直線的に大きく開き、端部は屈曲し上方に引き上げられる。

Eb グリッドでは、IV層上面でP14～16の3基を検出した。平面形はいずれも円形で、断面形はU字形を呈する。規模は、径 0.30～0.49m、深さ 0.36～0.71m である。埋土は、P14・15が単層で、P16は2層に分層されたが、いずれも柱痕跡は確認されていない。遺物は、P15・16から鉄滾が出土しているが、図示していない。

Ec グリッドでは、Ⅲ層上面で P 8 ~ 10 の 3 基を検出した。このうち、P 9 と 10 は重複関係にあり、P 9 は P10 を壊して構築されている。平面形は円形が 1 基、梢円形が 2 基で、断面形は P 8 ~ 10 が台形で、P 9 は段を持つ U 字形を呈する。規模は径 0.54 ~ 0.62m、深さ 0.12 ~ 0.43m である。埋土は、P10 が単層で、P 8 ~ 9 は 3 層に分層されるが、柱痕跡は確認されていない。いずれのピットからも遺物は出土していない。

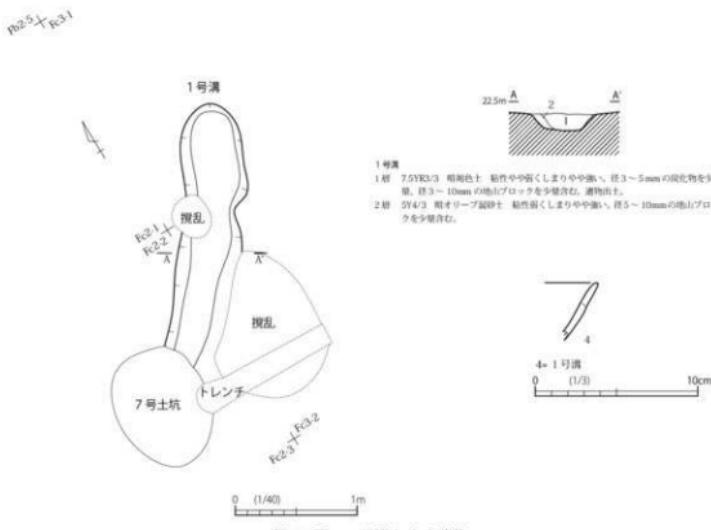
Fc グリッドでは、Ⅲ層上面で P11～13 の 3 基を検出した。このうち、P11 の西側は擾乱に壊されている。P12 は 8 号土坑を壊して構築されている。平面形は円形が 2 基、楕円形が 1 基で、断面形は U 字形と台形で、P13 は東側に段を持つ。規模は、径 0.46～0.62m、深さ 0.33～0.96m である。埋土は P11 が単層で、P12・13 は複層だが、柱痕跡は確認されていない。

遺物は、P12・13から土師器と須恵器の壺・甕片が出土しているが、小片のため図示していない。

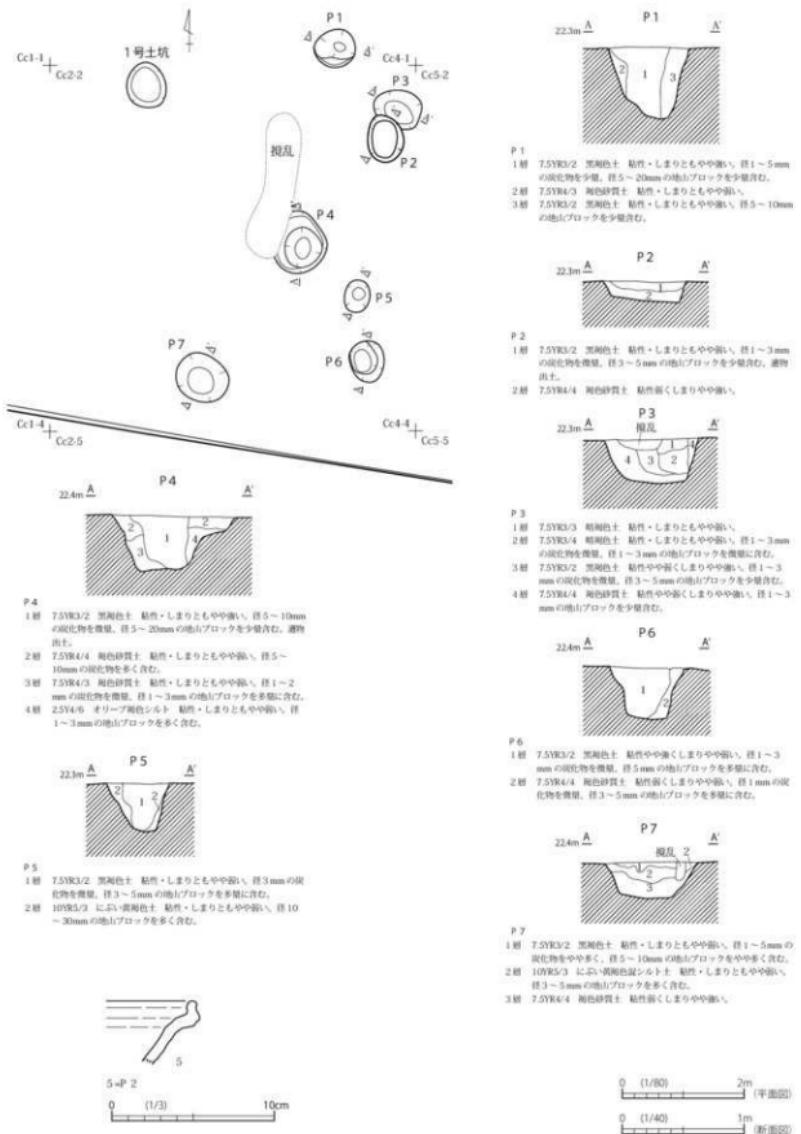
これらピットの帰属時期は、遺物が出土したP 2~4・12・13は古代と考えられる。

遺構外出土遺物（第15図） 遺構外からは、Ⅲ層および攪乱から土師器壺・甕・須恵器壺・瓶・甕が出土しており、その他に内面黒色土器の壺が少量と鉄滓、中世陶器の小片が少量出土している。このうち、Ⅲ層から出土した土師器壺2点と甕4点、須恵器壺2点と瓶1点、甕1点を図示した。

6・7はロクロ成形の土器器概である。6は無台榎で、Cc グリッドから出土した。体部はやや内湾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。底部は回転糸切りである。7はFc グリッドから出土した。体部は内湾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。

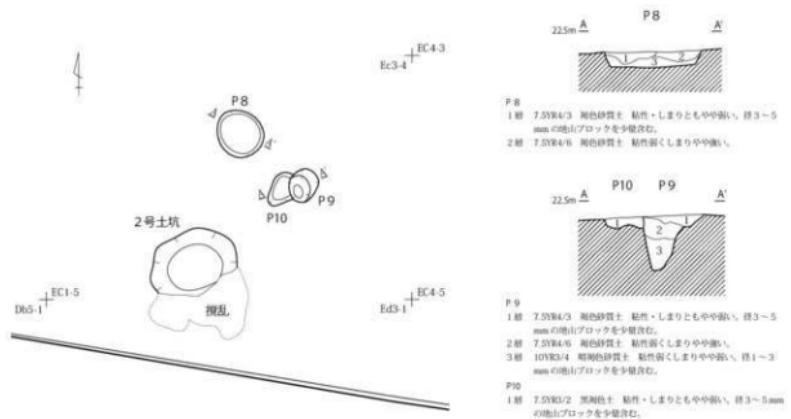


第11図 1号溝と出土遺物

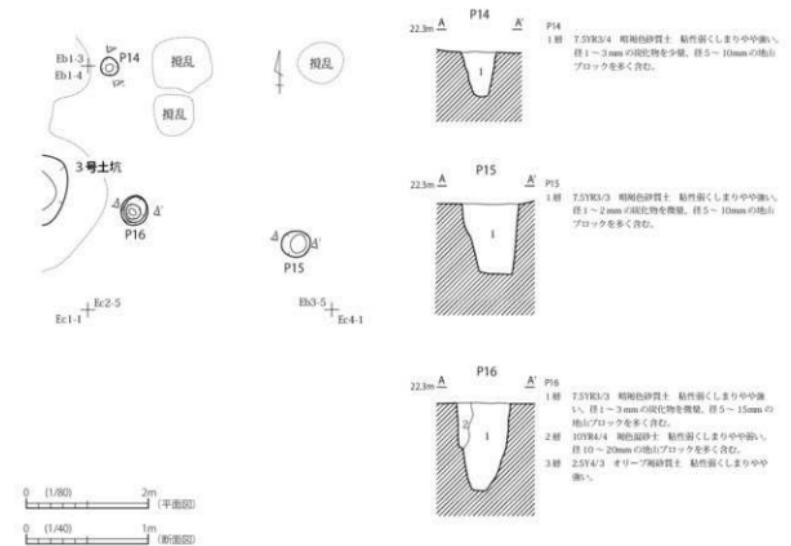


第12図 P 1~7 (Cc グリッド) と出土遺物

P 8~10(Ec グリッド)



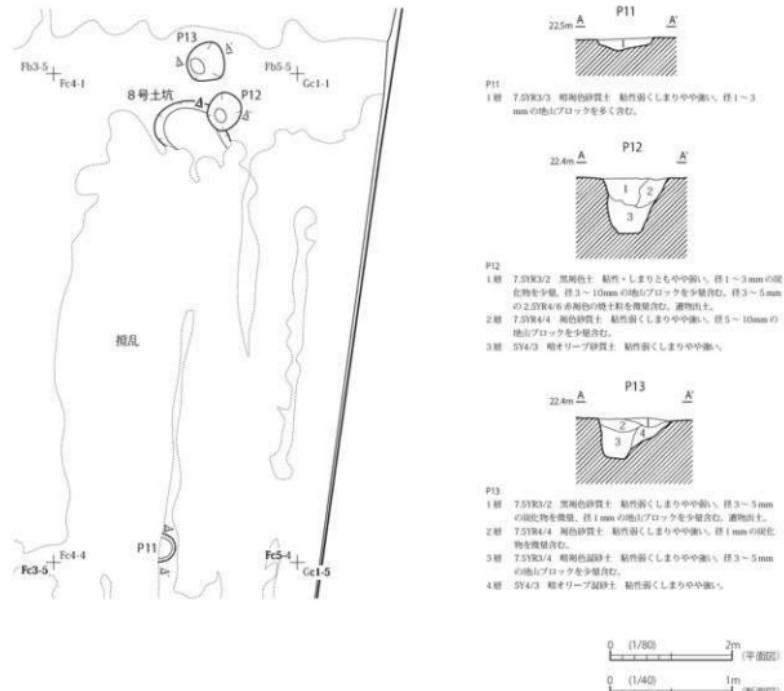
P14～16 (Eb グリッド)



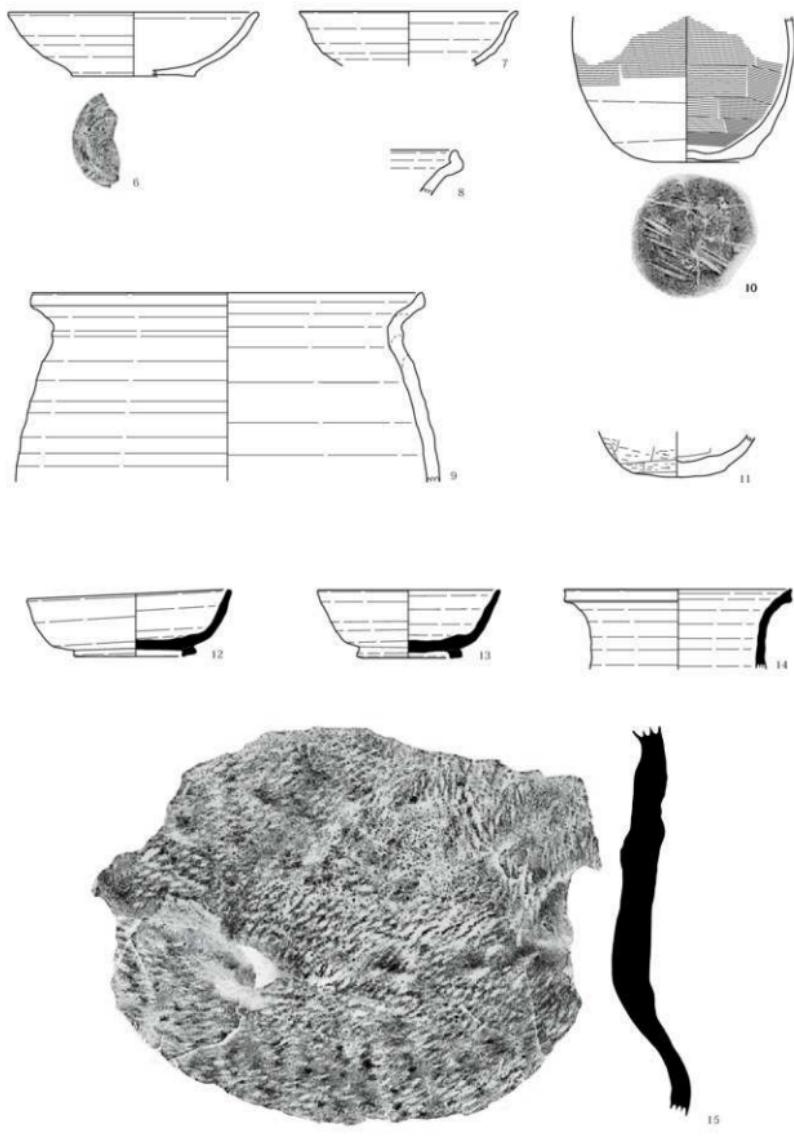
第13図 P8~10(Ecグリッド)・P14~16(Ebグリッド)

ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。8～11はロクロ成形の土器器甕である。8は口縁部で、Dc グリッドから出土した。頸部は外傾して開き、口縁端部は屈曲し上方に引き上げられる。9は長胴甕の口縁部～体部で、調査区中央部から出土した。口縁部は「く」の字状に外反し端部は肥厚する。10は小型甕の体部～底部で、Dc グリッドから出土した。体部外面はロクロのちカキメ、内面は全面にカキメが施される。底部は中央がやや凹む平底で、棒状工具による圧痕が見られる。外面に煤が付着する。11は小型甕の底部で、Dc グリッドから出土した。体部外面はヘラケズギが施される。底部は平底である。外面に煤が付着する。

12・13は須恵器有台环である。12は、Dc グリッドから出土した。体部はやや内湾して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。底部は回転ヘラ切りで、高台が貼り付けられている。高台端部は内端接地である。13は、Dc グリッドから出土した。体部は直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。底部は回転ヘラ切りで、高台が貼り付けられている。高台端部は内端接地である。内面に自然軸が付着する。14は須恵器瓶の口縁部で、Ec グリッドから出土した。頸部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部は肥厚して面を持ち、中央が緩やかに凹む。内面に自然軸が付着する。15は須恵器甕の体部で、Cc グリッドから出土した。焼け歪みが顕著で、焼き彫れが多数みられる。外面は平行タタキが施され、内面は当て具痕が見られる。外面上部と内面全面に自然軸が付着する。



第14図 P11～13 (Fc グリッド)



第15図 遺構外出土遺物

0 (1/3) 10cm

表1 遺構観察表

遺構名	分類		規模		柱行×梁行(m)		主軸方位	出土遺物	時期	緯度	写真
	半明		1間以上		(2.0) × (3.3)						
	重複・新旧混用		柱穴		ダリット		柱頭	平面図	柱軸	柱頭	深さ
1号柱基礎	P 1	柱穴	柱頭	平面図	柱軸	柱頭	深さ	柱間寸法	(cm)		
	P 2	柱穴	柱頭	平面図	柱軸	柱頭	深さ	柱間寸法	(cm)		
	P 3	柱穴	柱頭	平面図	柱軸	柱頭	深さ	柱間寸法	(cm)		
遺構名	グリッド	見幅(cm)	主軸方位	出土遺物	重複・新旧混用	時期	緯度	写真			
1号土坑	Gc2-2	74	65	22	土頭遺物・黒、須恵器	9世纪後半	9	3			
2号土坑	Gc1.5+2.5	149	(104)	22	N67°E	土頭遺物・黒	古代	9	3		
3号土坑	Rb1.4+5	124	116	24	N73°W	土頭遺物	不明	9	3+4		
4号土坑	Rb1.4+5	77	(45)	12	—	—	<4号土坑	不明	9	4	
5号土坑	Rc1.2+3、2.2+3	85	71	14	—	土頭遺物	不明	10	4		
6号土坑	Rc2-3	67	61	39	—	土頭遺物	古代	10	4		
7号土坑	Rc2-2	98	76	36	—	土頭遺物・黒	古代	10	4+5		
8号土坑	Rc4.1+5.1	(132)	99	10	N42°W	土頭遺物	>P12	古代	10	5	
9号土坑	Dc4.1+2、5.1+2	120	96	30	N35°E	土頭遺物・眞洋	古代	10	5		
1号土坑	Rc2.2、3.1+2	(207)	52	13	N39°E	土頭遺物・黒、須恵器	>7号土坑	古代	11	5	
P 1	Cc4.1+2	67	60	59	—	—	不明	12			
P 2	Cc4.2	78	59	17	N40°W	土頭遺物	>P 3	古代	12		
P 3	Cc4.2、5.2	79	61	36	N63°W	土頭遺物、眞洋	>P 2	不明	12		
P 4	Cc3.3、4.3	104	(78)	44	N3°W	土頭遺物	不明	12			
P 5	Cc4.3+4	53	42	38	N18°E	—	不明	12			
P 6	Cc4.4	68	55	41	N11°W	—	不明	12			
P 7	Cc3.4	88	77	30	—	—	不明	12			
P 8	Rc2-4	61	73	12	—	—	不明	13			
P 9	Rc3.4+5	54	46	43	N37°E	—	>P10	不明	13		
P10	Rc2.5、3.5	62	(29)	17	N42°E	—	<P 9	不明	13		
P11	Rc4.4	46	26	96	—	—	不明	14			
P12	Rb5-1	60	54	44	N37°E	土頭遺物	>8号土坑	古代	14		
P13	Rb5.5、6c5-1	62	59	33	—	土頭遺物・黒、須恵器	古代	14			
P14	Rb2.3+4	30	28	36	—	—	不明	13	5		
P15	Rb3.5	47	42	56	—	眞洋	不明	13	5		
P16	Rb2.5	49	44	71	—	眞洋	不明	13	5		

表2 遺物観察表 *前10件のみ：其一其石、石・石瓦、黒・黒陶片、眞・眞洋片、半（）内に推定年数、内は残存状況

No.	遺構	調査段・層	種別	形態	分析値(%)		測定値	測定方法	成形・調整	色調	寸寸	備考	緯度		
					日透	露透	底透								
1	1号土坑	Gc2-2	土頭部	桿	(13.8)	(3.1)	—	1/12	ロクロ(左)	7.5WRT/4に於 シルト質で緻密、1mm 以下の長・短少	9				
2	1号土坑	Gc2-2	I	須恵器	圓錐形	—	(22.4)	—	5/12	ロクロ(左)	N50°W灰	粘土質で緻密、2mm以 下の長・短少	9		
3	7号土坑	Rc2-2	I	土頭部	無台輪	—	(1.5)	4.8	1/12	ロクロ(右)、凹輪底 切り	10WRT/4に於 シルト質で緻密、1mm 以下の差	10			
4	1号溝	Rc2-2.3.1+2	I	土頭部	桿	—	(3.5)	—	1/12	ロクロ	10WRT/3に於 シルト質で緻密、2mm 以下の短・少	11			
5	P 2	Gc4-2	土頭部	黒	—	(3.2)	—	1/12	ロクロ	10WRT/3に於 シルト質で緻密、2mm 以下の長	12				
6	—	Gc	III	土頭部	無台輪	(15.4)	3.9	(7.4)	1/4	ロクロ(左)、凹輪底 切り	10WRT/4に於 シルト質で緻密、4mm 以下の長・短少	15			
7	—	Rc	III	土頭部	桿	(13.4)	(3.4)	—	1/12	ロクロ(左)	10B8/4、凹輪底 切り	シルト質で緻密、4mm 以下の長・短少	15		
8	—	Dc	III	土頭部	黒	—	(2.7)	—	1/12	ロクロ	10BV6/4に於 シルト質で緻密、1mm以下 の長・短少	15			
9	—	—	III	土頭部	黒	(24.1)	(11.6)	—	1/12	ロクロ(左)	10WRT/3に於 シルト質で緻密、5mm 以下の長・短少	15			
10	—	Dc	III	土頭部	小切妻	—	(8.9)	7.3	4/12	ロクロ→カキホ	10WRT/4に於 シルト質で緻密、5mm 以下の長・短少	15			
11	—	Dc	III	土頭部	小切妻	—	(2.8)	5.7	1/12	ロクロ→ハラケツリ	10WRT/4に於 シルト質で緻密、2mm 以下の長・短少	15			
12	—	Dc	III	須恵器	有台輪	12.4	3.9	6.6	1/1	ロクロ(左)、斜輪底 へ少切り、高台部鋸歯	N50°W灰	粘土質で緻密、5mm 以下の長・短少	15		
13	—	Dc	III	須恵器	有台輪	11.3	4.2	6.4	11/12	ロクロ(左)、斜輪底 へ少切り、高台部鋸歯	N50°W灰	粘土質で緻密、4mm 以下の長・短少	15		
14	—	Rc	III	須恵器	黒	(11.9)	(4.9)	—	1/12	ロクロ	N50°W灰	粘土質で緻密、1mm以 下の長・短少	15		
15	—	Gc	III	須恵器	黒	—	(23.0)	—	1/12	外・平行タタキ 内: 丸・具鉢	7.5W/1灰	粘土質で緻密、2mm以 下の長・短少	15		

第IV章 ま と め

今回の発掘調査は遺跡の全域を対象としたが、過去の整地および畑地耕作により全面にわたって大きく擾乱を受けており遺跡の遺存状態は良好ではなかった。このため検出できた遺構はわずかであり、伴出遺物も僅少であった。表土および擾乱からは一定量の出土遺物もあるが、いずれも細片であり詳細を窺えるものはごく一部にとどまった。以上、極めて限定的な資料ではあるが、検出した遺構と遺物の概要から本遺跡の時期を考察したい。

検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土坑9基、溝1条、ピット16基である。遺構は概ね3か所のまとまりを持って分布するが、各遺構の性格は不明で関係性を知ることはできない。また、掘立柱建物は調査区の外に続いて展開するが、調査区外は大きく削平されており正確な規模等は不明である。遺構出土の遺物はいずれも土師器椀が主体で、小片で図化しなかった薄手の須恵器無台杯が少量加わる。遺構による出土遺物の差異はなく、大きな時期差は認めがない。遺構外出土の遺物をみると、食膳貝の多くを土師器椀が占め、これに加えて図示し得なかった小片の須恵器無台杯と黒色土器椀が若干見られる。遺構出土の遺物と様相に大きな違いはない。これらの土師器椀が主体を占めるという特徴は、近隣では新発田市正尺遺跡（川上2000）・空毛遺跡3期（笠澤2012a）など9世紀後半頃に認められるものである。本遺跡も同時期を主体とすると言えよう。なお、遺構外出土で2点の須恵器有台杯（第15図12・13）があるが、胎土および器形から在地産の可能性が高い。口径はいずれも12cm前後で、うち1点はやや深身である。どちらも笠神丘陵窯跡群3期（笠澤2012b）の資料に類似し、8世紀末から9世紀前半の可能性があり、遺構出土遺物よりも時間的に若干先行すると考えられる。ただし、遺構出土の遺物には同時期の資料は認められない。

以上のことから、本遺跡は概ね9世紀後半の短期間に営まれた集落と考えられる。擾乱の影響が大きいため、規模については不明な点も多いが、表土等も含めた出土遺物量を考慮すれば、比較的小規模な集落であったと考えたい。

周辺の古代遺跡を見ると、概ね8世紀前半から9世紀後半にかけて消長が認められる。このうち9世紀後半には掘立柱建物に歛状小溝が付随した集落に象徴される「王朝国家（型）村落」が成立（坂井1989）し、周辺でも同様の特徴を持つ遺跡数は少なくない。本遺跡の場合は集落の具体的な様子を見通せないものの、短期間で廃絶する点や沖積地の自然堤防状の微高地に立地する点など周辺の遺跡との共通性も指摘でき、從来の認識の中で理解可能だといえる。

【引用参考文献】

- 阿部洋輔 2009 「高野山に供養された新発田の人びと」『新発田郷土誌』第37号 新発田郷土研究会
- 阿部洋輔・木村宗文 1980 「新発田市域の莊園」『新発田市史』上巻 新発田市
- 家田順一郎ほか 1981 「曾根遺跡Ⅰ」 豊浦町教育委員会
- 家田順一郎ほか 1982 「曾根遺跡Ⅱ」 豊浦町教育委員会
- 萩野正博 1980 「加地荘・農田荘の莊城」『新発田市史』上巻 新発田市
- 川上貞雄 1999 『志村山須恵窯跡』 豊浦町教育委員会
- 川上貞雄 2000 「正尺遺跡・小坂館遺跡・妻ノ神遺跡」 豊浦町教育委員会
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編 1989 「浦」『角川日本地名大辞典 15 新潟県』角川書店
- 桑原正史 1980 「律令時代の阿賀北地方」『新発田市史』上巻 新発田市
- 国土地理院 1993 「1:25,000 土地条件図 新発田」 国土地理院
- 齋藤秀平編 1937 『新潟縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第七輯』新潟県
- 坂井秀弥 1989 「第VII章 まとめ」『山三賀Ⅱ遺跡』新潟県教育委員会
- 笛神団体研究グループ 1980 「新潟平野東縁部・笛神丘陵の地質」『地球科学』34巻3号 地学団体研究会
- 笛澤正史 2012a 「第VII章 まとめ」『空毛遺跡 発掘調査報告書』新発田市教育委員会
- 笛澤正史 2012b 「第V章 まとめ 2 遺物の時期的な位置付けと特徴」『地蔵洞A遺跡 発掘調査報告書』新発田市教育委員会
- 新発田市教育委員会編 1998 『市道関係遺跡発掘調査報告書!』新発田市教育委員会
- 新発田市教育委員会編 2012a 「空毛遺跡 発掘調査報告書」新発田市教育委員会
- 新発田市教育委員会編 2012b 「地蔵洞A遺跡 発掘調査報告書」新発田市教育委員会
- 新発田市教育委員会編 2015 「横堀前遺跡 発掘調査報告書」新発田市教育委員会
- 新発田市教育委員会編 2019 「真栄沢遺跡 発掘調査報告書」新発田市教育委員会
- 間雅之・本間信昭ほか 1981 『真木山製鉄遺址』 豊浦町教育委員会
- 矢田俊文・新潟県立歴史博物館編 2008 『越後文書宝翰集 大見安田・水原氏文書』 新潟大学「大城の文化システムの再構成に関する資料的研究」プロジェクト
- 山本隆志 2008 「高野山清浄心院「越後過去名簿」(写本)」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第9号 新潟県立歴史博物館



完掘状態（東から）



完掘状態（南から）

図版2 調査前の状況、調査状況、基本土層、1号掘立柱建物の調査状況



調査前の状況（西から）



遺構精査の状況（南から）



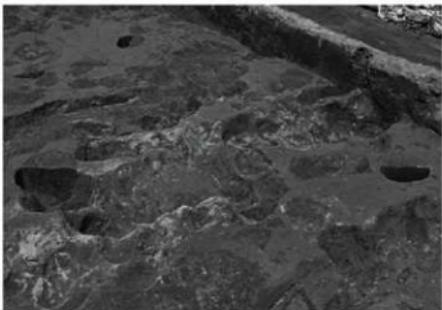
調査区北壁 基本土層（南から）



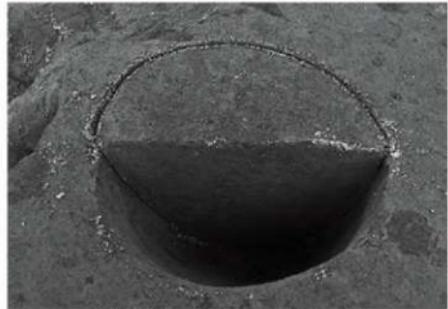
調査区南壁西側 基本土層（北から）



調査区南壁東側 基本土層（北から）



1号掘立柱建物 P1・P2 土層断面（東から）



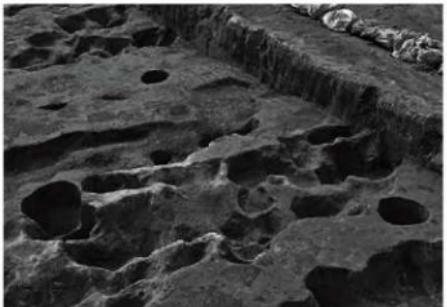
1号掘立柱建物 P1 土層断面（東から）



1号掘立柱建物 P2 土層断面（東から）



1号掘立柱建物 P3 土層断面（南西から）



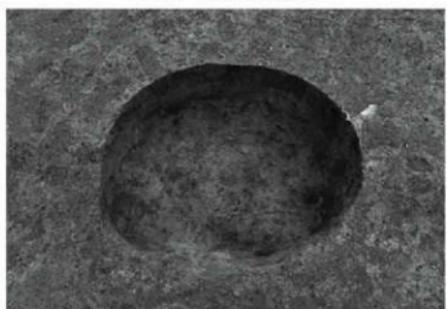
1号掘立柱建物 完掘状態（東から）



1号土坑 土層断面（東から）



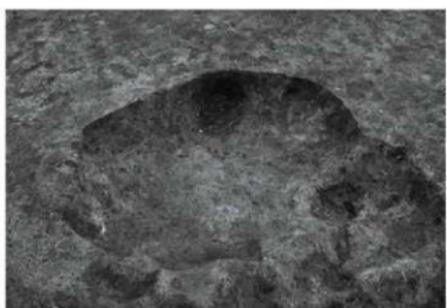
1号土坑 遺物出土状態（東から）



1号土坑 完掘状態（東から）



2号土坑 土層断面（南から）

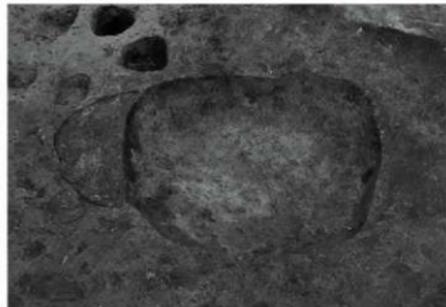


2号土坑 完掘状態（南から）

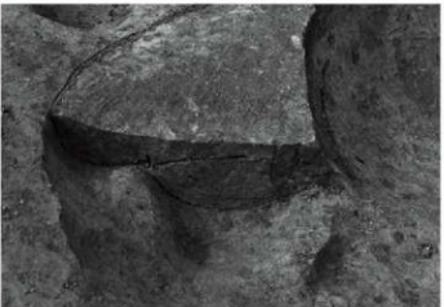


3号土坑 土層断面（南から）

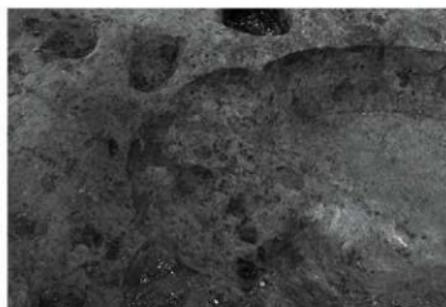
図版4 3～7号土坑の調査状況



3号土坑 完掘状態（南から）



4号土坑 土層断面（南から）



4号土坑 完掘状態（南から）



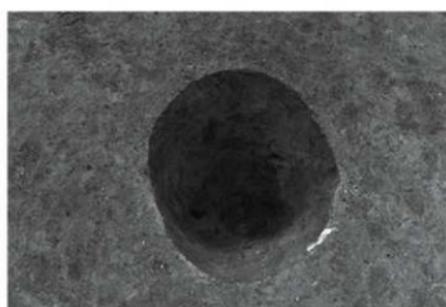
5号土坑 土層断面（東から）



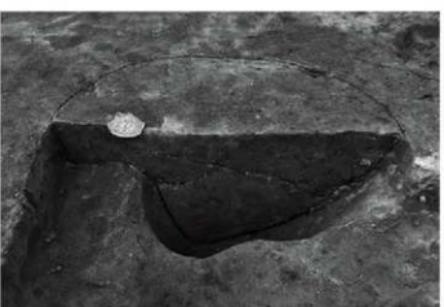
5号土坑 完掘状態（東から）



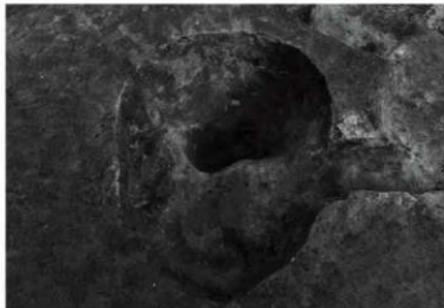
6号土坑 土層断面（東から）



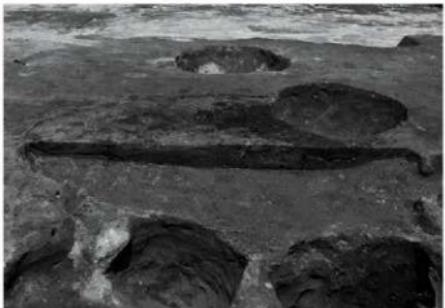
6号土坑 完掘状態（東から）



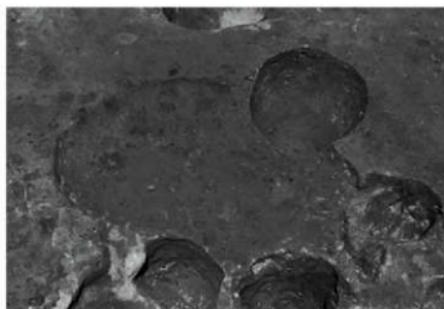
7号土坑 土層断面（南から）



7号土坑 完掘状態（南から）



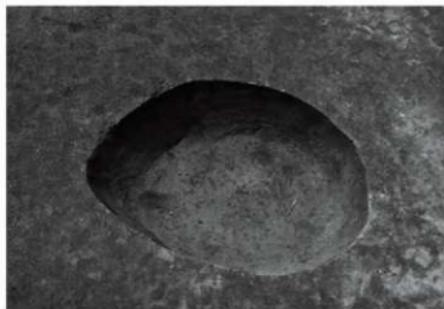
8号土坑 土層断面（南から）



8号土坑 完掘状態（南から）



9号土坑 土層断面（東から）



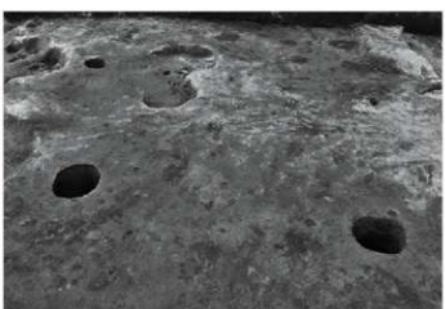
9号土坑 完掘状態（東から）



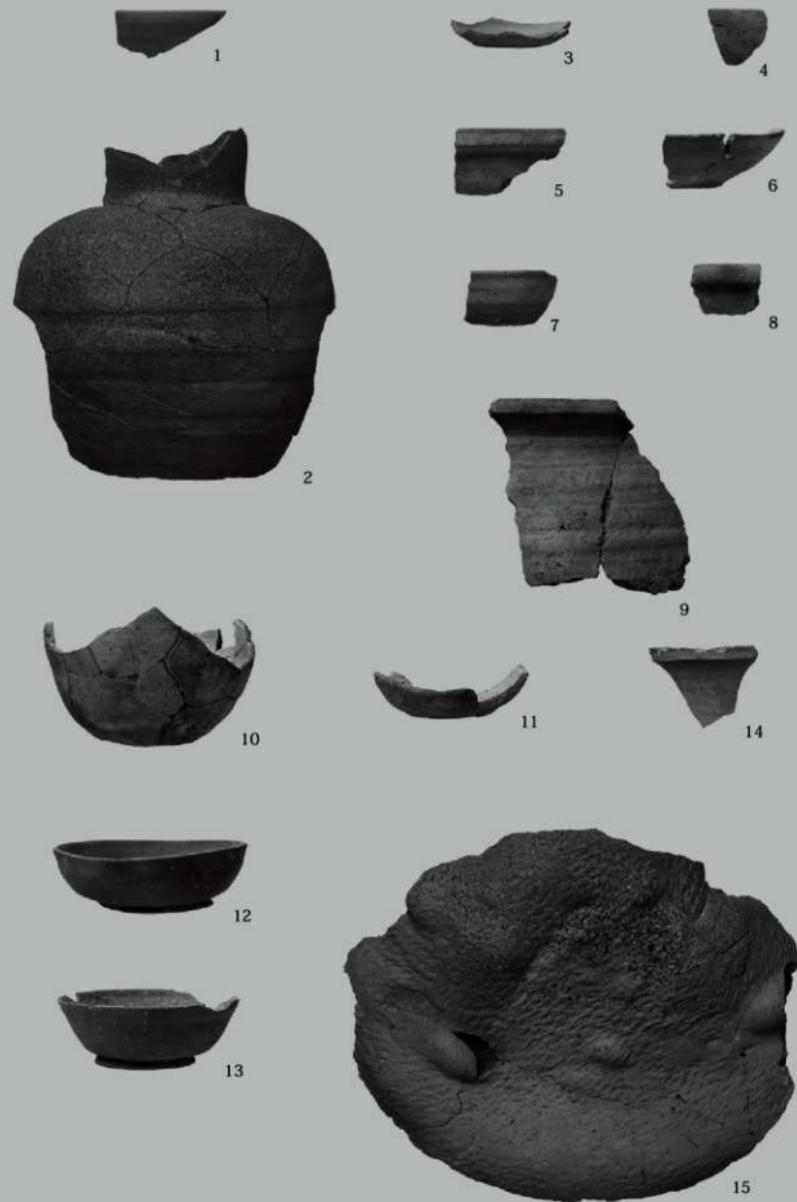
1号溝 土層断面（南から）



1号溝 完掘状態（南から）



P14～16 完掘状態（南から）



報 告 書 抄 錄

助橋下遺跡 発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業（松浦地区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 II

発 行 令和2（2020）年10月9日

新発田市教育委員会

新潟県新発田市乙次281番地2

印 刷 有限会社 藤田印刷

本書は、本文・図版ともに中性紙を使用しています。